

ルカによる福音書15章1-2節 「罪人を受け入れる」

1A 話を聞きにくる罪人たち 1

1B 取税人と罪人

2B 試しに来るパリサイ人

2A 「受け入れる」ということ 2

1B パリサイ派と律法学者

2B 律法主義という壁

3B 罪人への慰めと希望

1C 交わり

2C 救いの希望

4B 犠牲による受け入れ

1C 血の対価

2C 義の転嫁

3C 互いの受容

本文

今朝は、ルカによる福音書 15 章です。午後礼拝で章全体を見ていきますが、今朝は冒頭の 1-2 節に注目したいと思います。「1 さて、取税人たちや罪人たちがみな、話を聞こうとしてイエスの近くにやって来た。2 すると、パリサイ人たち、律法学者たちが、「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」と文句を言った。」

1A 話を聞きにくる罪人たち 1

私たちは前回、イエス様が安息日に、パリサイ派の指導者に家に、食事に招かれたところを読みました。今回はその対象的な姿から始まります。イエス様の、取税人や罪人との食事です。前回のパリサイ派の指導者の家における食事では、水腫を患っている人がイエス様の前にいて、イエス様が何をするのかをじっと周りが見つめていた、ということがありました。以前に、他のパリサイ人の家で食事を取られていた時に、手洗いの儀式を守っておられないので、周りの者たちが驚いたと書かれている箇所もありました。

いかがでしょうか？どちらの食事のほうが、ほっとして食べられるでしょうか？確かに取税人や罪人が集まっていれば、作法が悪かったり、不敬虔なこと、不道德な言葉ももしかしたら出てきたかもしれません。けれども、後で説明しますが、彼らは御言葉を聞きに来たのであり、悔い改めの心をもって聞きに来ている人々です。ですから、そういった悪い言葉や作法も少なかったことでしょう。その反面、パリサイ派の家にいけば、ご自身について絶えず監視され、判断され、とやかく言

われ、裁かれていたのです。食事というのが、平和と豊かさを表しているということを、前回、お話ししました。そうしたものは裏腹の、とげとげしい姿です。

チャック・スミスが、愛について説明する時に、こんなことをよく話していました。「私は、間違っただけの事実を持っていても正しい態度でありたい。正しい事実を持っていても、間違っただけの態度でいたくない。(I would rather have the wrong facts and a right attitude, than right facts and a wrong attitude.)」つまり、こういうことです。「間違っただけの発言や行動をしてしまっても、正しい心、態度を持っているなら、それが間違っただけと言われた時に、正すことができる。けれども、正しい事実を持っていても、そこで悪い態度であれば、間違っただけなのではないか？と言われても、決して正そうとはしない。」ということです。間違っただけなのではないか？と指摘されても、全く正さないどころかかえって責め立て、相手を引き落とし、中傷することもあります。イエス様は、へりくだり、悔い改める者たちと食事をされますが、自分を正しいとし、裁く人のところでは、本当の意味で食事は食べられません。イエス様はパリサイ派の人たちの間違っただけのところを、喩えでもって過ちを指摘し、それから、その場を離れました。

1B 取税人と罪人

そこで、改めて「取税人たちや罪人たちがみな、話を聞こうとしてイエスの近くにやって来た。」というところを考えてみたいと思います。これまでも何度も出て来ましたが、取税人がどのような人たちだったのかを考えます。ユダヤ人は、ローマによる徴税に苦しんでいました。生活の一つ一つが課税対象となっていました。そして、イエス様が神殿におられた時に、「20:22 カエサルに税金を納めることは、律法にかなっているでしょうか、いないでしょうか。」との詰問を受けた所からも分かるように、ユダヤ人はローマを憎み、その徴税を憎んでいました。経済的な苦しみだけが理由ではありません。徴税によって、自分たちがローマの主権の中に生きていることを、否が応でも意識せざるを得ないからです。

そして、帝国主義の中で問題になるのは、自分の仲間であるはずの者たち、同胞が、自分たちの憎む側について、私欲を貪っていることです。ローマ人がユダヤ人に酷い仕打ちをしているのならともかく、仲間のユダヤ人がローマ人の側についてユダヤ人を虐げているならば、そのユダヤ人を酷く嫌うはずで、そうやって、帝国というものは、同じ民族間で従属の関係を創り出し、それで仲間でいがみ合うようにさせて、自分たちに対して結束して敵対することができないように、力を削ぐということを行います。取税人は、まさにローマについて私腹を肥やすユダヤ人だったのです。ローマに代わってユダヤ人から徴税し、そして実際の額よりもっと多くの額を徴税することも許されていました。税金の委託業です。それで金持ちになっていたのです。

それでユダヤ人は取税人を嫌っていましたが、パリサイ派と律法学者は、彼らを「罪人」と共に数えています。ここでの「罪人」というのは、具体的には遊女のような類ですが、あまりにも罪深い

ので、ユダヤ人として求められる基本的なこと、律法を守ることも期待しない部類に入れていました。もうユダヤ人ではない、というぐらいにあしらっていたのです。パリサイ人は、取税人との売買取引を禁じていました。もちろん、食卓に着くことも禁じられています。清めの儀式を彼らの前で論じることも禁じていたのです、なぜなら、彼らが清められてはいけなとまで考えていました。こうした罪人は、悔い改めて救われてもいけないと考えていました。神が彼らを滅ぼすことを喜ばれているとまで考えていました。

けれどもイエス様は、このような彼らの義の基準に挑戦を与えておられましたね。山上の垂訓で、「マタ 5:20 あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」と言われました。それは、彼らがそうやって罪を憎み、罪人を憎んでいます、実は彼ら自身の心にも、その憎むべき罪があることを炙り出しておられたからです。彼らが憎んでいるその悪い欲を、彼ら自身も持っていることを示されていたからです。ですから、全ての人が自分のいのちを憎む、イエス様は群衆に、「14:26 自分のいのちさえ憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。」と言われましたが、自分にある罪や欲に気づいて、それを激しく憎まなければ、つまり、罪を捨てて、悔い改めて、神に立ち返ることをしなければ、救われないということを教えられたのです。先ほど言いましたように、自分が正しいと思いこんでいると、自分にある罪が全く見えなくなってしまう、盲目になってしまいます。

ところで、14章でイエス様は、「14:33 自分の財産すべてを捨てなければ、あなたがたはだれも、わたしの弟子になることはできません。」と言われました。これは、文字通り財産を捨てるということではありません。そうではなく、自分のいのちの保証を財産に置いている私たちの心の姿を明らかにしている言葉です。私たちの生活は、何やらかにやらいっても、経済的な理由で動いています。生きていくためには財が必要なのです。しかし、そういった財をも、主に従うということにおいて、この方にお任せするということです。自分でしっかりと働くのですが、日々の必要を満たされるのはあくまでも神であり、自分ではない。神が豊かさを加えられるのであって、自分の努力は虚しいということを示しています。

このことをよく知っていたのは、実は取税人だったのです。彼らこそが、お金の流れと人の心の動きをずっと見てきた人々です。そして財というものが、人が永遠のいのちを得るのに妨げになっているということも、生々しく知っている人々です。それで、おそらくはイエス様の「自分の財産すべてを捨てなければ、あなたがたはだれも、わたしの弟子になることはできません。」と言われた言葉に、むしろ正しく応答したのではないか？と思われる。後に出て来る取税人ザアカイも、自分の財を貧しい人々に施して、不当に取った金は四倍にして返すと反応していました。お金についてはとことんまで知り尽くしている彼らだからこそ、イエス様の塩味のきいた言葉に正しく反応し、応答していたのでしょう。悔い改めの心をもって、イエス様のところに聞きに来ています。

2B 試しに来るパリサイ人

ということで、主のところに来るのに、御言葉を聞きにくる人もいれば、裁く人もいます。私たちが物理的に教会に来ているということが、御言葉を聞きにくることを保障しません。なぜなら、パリサイ派や律法学者のように、物理的にイエス様のところに来ても、御言葉を聞くのではなく、そのなすことを批判するために来ていたのです。私たちは、心をいつも確かめ、吟味する必要がありますね。いろんなことを見て、耳にする時に、そこで主の声を聞こうとして努力しているのか、それとも、自分があたかも裁判官か警察であるかのように、判断し、ひどければ裁くことが自分の使命のようになっているか？であります。

2A 「受け入れる」ということ 2

そこで 2 節を見ましょう、「2 すると、パリサイ人たち、律法学者たちが、「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」と文句を言った。」

1B パリサイ派と律法学者

パリサイ人ではありますが、彼らはどのような存在かを思い出したいと思います。彼らの起源を遡ると、ダニエル書に預言されている、ギリシアの王、アンティオコス・エピファネスの支配下でのことでした。彼は激しい迫害をユダヤ教徒に対して行い、徹底的なギリシア化をしようとしていました。その政策に反発したハシディームと呼ばれる、敬虔派とも呼ばれる人々です。パリサイは、「分離」という意味があり、「律法を守らぬ者たちと自らを分離する」という意味合いがあります。彼らが、シナゴグ(会堂)の中で、律法の朗読とその解き明かしに熱心になっていき、それで一般的なユダヤ人の間では、ラビ(教師)と言え、パリサイ派であり、彼らが標準のユダヤ教を教えていました。これが、紀元後 70 年に神殿が破壊されてからは、サドカイ派は消えていきましたが、パリサイ派は残り、今のユダヤ教はパリサイ派を由来としています。

何か私たちにも通じる場所がありませんか？キリスト教会の中に深刻な、真理への妥協があります。それに対して、プロテスト、抗議したのがプロテスタントです。そして聖書を最高の権威として掲げ、聖書を読み、その解き明かしを聞きます。そして、真理が純粹ではないとして、後に敬虔派というのも出て来て、既存の教派から分離する人々もいました。ですから、パリサイ派は私たちが考える以上に、はるかに私たちに似ているということを知る必要がありますね。

そして律法学者は、バビロンから帰還した人々に聖書を教えたエズラがその初めであり、聖書を解き明かし、また写本に携わっている人々です。律法の解釈と言え、彼らの存在は欠かせませんでした。これも、正確に聖書を釈義するということを重んじるという点において、私たちにとって遠くかけ離れた存在ではなく、むしろ近い存在です。正しい教えは大切ですね、けれども、その正しい教えを持っているということが、正しいのではないということは、非常に気を付けないといけません。パウロは、ローマ 2 章で、律法をなぜ自分自身に教えないのか？と言って、神の教えを持つ

ていると誇っていることそのものが、正しくないことを論じているのです。

ゆえに、ここに出てくる不満は、私たち自身も抱きかねない不満ではないでしょうか。「罪人と関わっているではないか？」という不満です。以前もお話しましたが、テレビ伝道がアメリカで定着していたころ、ジム・ベーカーという人が話題になっていました。彼は、不倫しただけでなく、お金の流用で捕まり、牢屋に入りました。ジム・ベーカーの番組に、ビリー・グラハムも出演していました。そしてジム・ベーカーが捕まった後に、牢屋にいる彼の元に、ビリーは訪問しました。そして、ジム・ベーカーを抱擁し、I love youと言ったのです。彼を受け入れ、彼の罪を責める言葉は一切ありませんでした。彼が刑務所から出所した後、彼が出席する教会の隣に座ったりして、支援し続けました。それゆえに、なぜ、そんな金と女にまみれた、似非伝道師に関わっているのだ？という非難が出ました。これはまさに、律法を破っている者とは分離すべきだとしたパリサイ人と変らない反応になっているのです。

2B 律法主義という壁

ところで、パリサイ派の指導者の食事の席からイエス様が出て行って、歩いていたところで、彼らが集まって来たということが大事です。イエス様は、披露宴の喩えを語られて、招待した者たちが拒み、からだの不自由な人々を招きなさいと言っている場面があります。そういったところに、おそらく取税人や罪人は、壁が崩れたのを感じたことでしょう。それまで、彼らの中にある掟の壁が、他の人々が入り込むことのできなくさせていたのでしょう。それが、砕かれています。パウロが言っている通りです。「エペ 2:14 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、15 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。…」

パリサイ派は、外に出たら、汚れた者に触ることがないように、つまり、取税人や遊女、また異邦人に触れることのないように、着ている物でひらひらしているところは縛り付けます。そして異邦人も歩いたと思われる市場を歩いたのであれば、ユダヤ人の多く住む地域に入る前に、足のちりを振り落とします。そのようにして汚れから分離することに命をかけていたのです。ましてや、人と食事をすることは言語道断です。食事をすることは、一体になることを意味していました。

ですから、聖書では二箇所、ユダヤ人が彼らを避けた場面があります。一つはペテロです、ローマの百人隊長コルネリウスにペテロを神が遣わそうとされて、天からのふろしきの幻を彼に見せました。汚れたものとされる動物がそこに入っていたので、ペテロは、そのようなものは食べられないと拒否したのです。ところが、天からは「神のきよめたものを、なぜ食べないと言うのか。」という声があり、それでペテロは使いについて行って、コルネリウスの家に入ったのです。もう一つは、同じペテロです、アンティオケの教会にいる時に、異邦人の信者と食事を取っていました。ところが、エルサレムから割礼派と呼ばれる人たちがやって来た時に、いつの間にかその席を外していたの

です。それでパウロが面前と、ペテロを非難しました。それだけ、ユダヤ人の間には壁があったのです。克服するのは、イエス・キリストの恵みを自分がどれだけ知っているかにかかっています。

私たちが、キリストご自身以外のものでも壁を作っているとすれば、私たちこそが自分の心にある壁を主にあって打ち壊すことができるように祈る必要がありますね。人をどれだけ受け入れることができるのか？ということでもあります。

3B 罪人への慰めと希望

そこでとても大事な言葉が、あります。パリサイ派、律法学者が不満をもって言った言葉の中に、慰めの言葉があるのです。「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」ですね。ここで大事なのは、「受け入れる」です。私たち人間は、根本的に受け入れられることを求めています。それが人に求めることが多いですが、私たちの魂は、全能者であり、創造主である神から受け入れられることを願っています。

1C 交わり

ですから、イエス様が受け入れておられるということは、私たちに深い慰めを与えます。主はラオディキアの教会の人々にこう言われました。「黙 3:20 見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」食事をする事ができる、つまり交わりができるということです。

2C 救いの希望

そして、イエス様が受け入れられるというのは、将来の希望にもなります。自分がどうして、終わりの日に受け入れられるのか、むしろ滅ぼされてしまうのではないか？という疑いを持ってしまいかもしれません。けれども、イエス様が受け入れられたのであれば、将来はなおさらのこと神の怒りから救われているのです。「ロマ 5:10 敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです。」ですから、私たちはイエス様と顔と顔を合わせて見える希望を持っています。そのようにして、イエス様は私たちを受け入れてくださるのです。

4B 犠牲による受け入れ

けれども、イエス様は聖い方で、正しい方です。どうして、その正しい方が罪人と交わりができるのか？という疑問が残るでしょう。ここでイエス様の独自性があります。汚れは、必ず他の人に移ります。ですから、パリサイ派は分離しなければいけないとしました。しかし、イエス様はその逆で、ご自身に近づく者たちをかえって清めることによって受け入れることができるのです。

1C 血の対価

しかし、それには犠牲があったことを決して忘れてはいけません。主が人を受け入れて、その人を清めることができるのは、ご自身がその血を流してくださったからです。「Ⅰヨハ 1:7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」主が血を流したので、そのような犠牲を払って、初めて私たちと交わりを持つことができになります。

2C 義の転嫁

それだけでなく、ご自身の義を私たちに贈り物ようにしてお渡しになられたからです。「Ⅱコリ 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。」私たちの罪をもって罪人とみなされました。このようにして、私たちの罪を背負うという犠牲を払ったのです。

3C 互いの受容

そこで主は、私たちキリスト者に互いに受け入れることを教えておられます。「ロマ 15:7 ですから、神の栄光のために、キリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れ合いなさい。」キリストが私たちを受け入れたのですから、互いに受け入れるのです。私たちはどこかで、自分を守るために壁を作っています。けれども、キリストが私たちの壁ですね、本来は。キリストが私を守る避難所になっておられ、だからこそ自分を自分で守る必要がないのです。そういった確信が満ちると、そこにはどんな人も、キリストにあって受け入れるということになります。

けれども、これは骨の折れる営みです。そこには、忍耐という聖霊の実が結ばれていないとできません。忍耐してあらゆる寛容を尽くして、その人を受け入れます。リスクを伴うかもしれませんが、その人は自分は大丈夫だと言うふりをしているだけなのかもしれないから。けれども、受け入れるのです。イエス様が弟子たちを受け入れ、実に、イスカリオテのユダまでを受け入れたことを思い出してください。彼が裏切るのは織り込み済みだったのでしょ。そこに希望を見いだします、イエス様が裏切り者を受け入れられたのと同じように、愛にはリスクが伴う時があります。しかし、イエス様は惜しみなく、ご自身を捧げられました。「15:3 キリストもご自分を喜ばせることはなさいませんでした。むしろ、「あなたを嘲る者たちの嘲りが、わたしに降りかかった」と書いてあるとおりです。」自分に嘲りが降りかかることさえあるのです。そうやって、私たちは主にあって受け入れることに専念されました。

自分が、汚れに影響されてしまうようなことがあるかもしれません。その時は分離してください、自分が離れないといけません。けれども、その汚れがなく、純粋な思いであれば、これまで関わったことのない人にも、手を差し伸べることができますね。